

第15回近畿学校保健学会

抄 録 集

日 時 昭和43年9月8日(日)

会 場 滋賀県厚生会館

近 畿 学 校 保 健 学 会

— 1968 —

15-00

第15回近畿学校保健学会抄録集

日 時 昭和43年9月8日(日)

会 場 滋賀県厚生会館

第15回近畿学校保健学会次第

受付開始	8:30	
1. 一般演説	9:00~11:20	歯科医会議室(5階)
2. シンポジウム	11:30~12:30	〃
(評議員会)	12:00~12:50	医師会会議室(3階)
(総 会)	12:50~13:00	歯科医会議室(5階)
3. シンポジウム	12:30~14:30	〃
4. 特別講演	14:30~16:00	〃
(会員懇親会)	19:30~17:30	グリル ベ ン け い (隣接合同ビル内)

演説注意事項

1. 一般演説は1題8分, 第1鈴6分, 第2鈴8分とします。追加質問時間を充分にとるため演説者各位には時間を厳守願います。
2. 各演者はスライド(演説内容)を演説予定時刻30分前までに受付(一般演説会場入口)に提出し係員にご指示ください。
3. 演説順序は場合により変更することがありますから, 演説者は早目に会場においでください。



タケダ薬品



疲労・倦怠感・肩こり・神経痛・リウマチ・筋肉痛
食欲不振・胃下垂・便秘・つかれ目・夜尿症などに
★5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ★くわしくは医師や薬局・薬店で

毎日！
アスピリン®
A

疲労はその日に解消しましょう

A-4

学校保健の総合研究月刊誌

健康教室

編集委員——下田 巧・船川幡夫・千葉たつ・
杉浦守邦・宮田尚之・植村 肇・北町一郎・
橘 重美・山田 茂・菅谷 昭・内田早苗・
玉井牧介・家村 勲先生ほか

★現場の要求に直結する健康教室は全国の学校で最も
多く読まれ活用されています。学校保健を語るとこ
ろ常に健康教室あり！

★論説・解説記事・資料紹介・研究発表・随想体験手
記・その他いつも新鮮で魅力たっぷりの編集内容で
す。...

★定価普通号 1部 ¥180 千¥12

好評の保健図書・新刊紹介

養護教諭の執務のすすめ方

新刊 安藤志ま著
定価 ¥950 千¥90

小学校の安全教育

新刊 佐藤龍三 ほか著
定価 ¥1500 千¥100

保健指導事例集

新刊 全国養護教員研究会編
定価 ¥750 千¥70

学校歯科新書

新刊 山田 茂 著
定価 ¥800 千¥70

絵で学ぶ救急法

新刊 村山知典 著
定価 ¥800 千¥80

発行所

京都市中京区
西ノ京藤ノ木町2

東山書房

電話 京都 841-9278
振替 京都 1067番

15-02

1. 血液型 (ABO式) 集団検定における過誤率とその防止策について (9:00)

山 田 一 (滋賀大教育学部)

災害時に備えたり、献血のため最近集団を対象として血液型 (ABO型) の検定がよく行われているが、血液型の検定は慎重に行なっても過誤を免れ得ない。

東大の大河内一雄氏は病室でのABO型判定の誤りは2361例中39例、即ち0.012%であったと報告され、京都府立医大で私の調査では総数 (保存血 200 ml) 48000中不適合輸血が8例 0.016%であり、これらは少数或は個人的血液型判定である。まして集団を対照とする時は色々の原因から一層過誤を生じ易い。

私の行った京都地方における4320人についての血液

型集団検定では次のような経験をした

- 1) 4320人中誤りは 28例 0.007%
- 2) A 型 1735人中 15例 0.009%
- B 型 929人中 7例 0.008%
- AB型 387人中 6例 0.016%
- O 型 1209人中 0例

であった。

- 3) 過誤防止の対策としてダブルチェックを根幹として成功した。

2. 幼児、児童の集団検尿による保健管理と指導について (9:10)

○今 井 英 夫 後 藤 英 二 山 本 紀 子 伊 東 祐 一 (大阪教育大養護)
橋 本 滋 子 (同, 附属平野小) 原 田 加寿美 (同, 幼)

腎炎の多発は Muri, Kempe 等の報告以来、わが国においても昭和30年頃より注目されはじめ、臨床的にも多大の関心をもたれてきた。また最近における腎炎の増加も特定な地域の集団的流行によるものではなく、一般的な多発傾向を示すものと考えられている。

近年各学校においても、児童、生徒の保健管理の一環として、糖、蛋白等の検出のための検尿が行われている。

しかし腎機能検査のうち重要な尿中赤血球の検出には迅速、かつ適確な方法がなく、そのため集団検尿では、主として尿糖、尿蛋白のみの検出が一般に行われている。

私共はヘアコンビスティックスを用いて、従来の方法と適宜比較し、毎年約 900名の幼児、児童の集団検尿を実施し、過去3カ年の成績から次のような結果を得た。

- 1) 昭和40年度においては尿潜血反応は、月経のものを除き10名、41年度は4名、42年度では1名の陽性者を検出した。
- 2) 尿蛋白は各年度共に初回検査時には、比較的多くの陽性反応がみられたが、体位蛋白尿陽性者を除き、昭和40年度では3名(3名共潜血反応陽性)、41年では5名(内2名は潜血反応陽性)42年では5名(内潜血反応陽性1名)が陽性であった。
- 3) 尿糖は初回検査時において若干陽性者を認めたが、これは尿採取容器の洗浄を充分行わせた結果、すべて陰性であった。
- 4) 尿PHは5~6のものが約94%で強酸、強アルカリ性尿は認められなかった。

以上の結果から学校保健管理上、集団尿検査の重要性を強調すると共に、児童、生徒並びに保護者に対する検尿の認識と指導が要望される。

3. 和歌山県紀の川流域における肝吸虫症の調査成績について (9:20)

○白 川 充 山 崎 千 里 (和歌山医科大学公衆衛生学教室)
長 花 操 吉 田 幸 雄 松 尾 喜久雄 近 藤 力王至
松 野 喜 六 山 田 万 里 白 坂 誠 一 高 橋 良 雄
栗 本 浩 織 田 清 (京都府立医科大学動物学教室)
藤 井 正 男 (大阪寄生虫病予防協会)

昭和40～42年にわたり、京都府立医大の長花研究室の手によって、紀の川流域におけるマメタニシの調査の結果、多数の地区において肝吸虫のメタセルカリアが発見された。

一方、大阪寄生虫病予防協会の援助により、昭和41～43年にわたって、和歌山市内の小・中学校の児童・生徒の検便を行なった結果、かい虫、鉤虫、べん虫、ぎょう虫、肝吸虫、横川吸虫、縮小条虫、異形吸虫などが検出された。概してこれらの感染率は決して高いものではないが、これらの寄生虫病の中で、検出法がさほど容易でなく、また治療も困難なものとあって、その早期発見と完全なる予防法の確立と徹底が望まれるものは、地域社会における衛生教育はもちろん、学

校保健の場においてもとりあげられねばならない。

当教室において、われわれは上記の寄生虫の中で、淡水魚の生食により感染、蔓延し、発育期の児童・生徒においては、殊にその及ぼす影響も大きいと思われる肝吸虫が発見されたので、その感染学童の家族全員の精密検査を行なったところ、母および子供3名の計4名に肝吸虫卵を認め、さらにその母の妹1名にも肝吸虫卵を認め、家族内感染の濃厚なることを知った。

そこでこの紀の川流域の地域住民の重点的精密検査が必要と考えられるに至り、学校保健の立場のみならず、衛生行政の立場からも、さらに流行地域の広汎な疫学的調査を続けることが必要であると考えられる。

4. 児童の自律神経緊張傾向 第28報 (9:30)

—母集団からみた特殊抽出児の特性—

○相 生 晃 一 寺 内 幸 雄 森 田 迪 子 (大阪、平野小)
神 原 栄 一 上 延 富久治 (大阪教育大学 PSM 研究会)

恒常性テストに表われた性格特性の比較検討により、抽出児(心身優秀とみられたもの)が、母集団の

中でどのような位置にあるか調べたものについて発表する。

5. 児童の自律神経緊張傾向 第29報 (9:40)

—恒常性テストと児童の行動特性との関連—

○寺 内 幸 雄 (大阪市立南百済小学校, 大阪教育大学 PSM 研究会)
上 延 富久治 相 生 晃 一 森 田 迪 子

目的行動を指示して一人で行動させた時、その児童のあらわす行動を恒常性テストの性格傾向特性から批

判、解析し、児童の実態を探究しようとするものである。

6. 小学校児童の家庭内生活時間の調査 (9:50)

—その1, 食事とテレビについて—

○山本紀子 須藤勝見 安藤 格 (大阪教育大養教養成所)
滝 儀子 (大阪教育大附属天王寺小) 西和田 純 (枚方開成小)
土居 文子 (大阪市立鷹合小)

昭和43年6月から7月にかけて、大阪市内2校、枚方市内1校において、小学校児童の家庭生活の中で、食事とテレビに要する時間の調査を行なった。

食事については、朝夕食とも所要時間のバラツキが大きく、少数において朝食を食べていない児童もみら

れた。

テレビについては、全く視聴していない児童も少数にみられた。視聴時間・視聴内容と学業成績について報告する。

7. 同上 (10:00)

—その2, 睡眠時間について—

○須藤勝見 山本紀子 安藤 格 (大阪教育大養教養成所)
滝 儀子 (大阪教育大附属天王寺小) 土居 文子 (大阪鷹合小)
西和田 純 (枚方開成小)

その1と同じ小学校児童について、1週間にわたって睡眠時間を調査した。

曜日と睡眠時間・就寝時刻、学年と睡眠時間・就寝

時刻、睡眠と学業成績等について、学校差、個人差がかなりあり、健康管理のうえからも多くの問題点を含んでいると考えられる。

6 8. 小学校内外傷の調査 (10:10)

○仲井正名 (大阪教育大養教養成所) 滝 儀子 (大阪教育大附属天王寺小)

近畿地方の国立大学附属小学校の児童について1年間の外傷のうち、医師の治療を要したものを調査したので報告する。

調査の対象とした小学校は15校、児童数は293名であった。

学年別では、上級生が下級生に比しやや多かった。

性別では、男子が非常に多く、女子の約2倍強であった。

季節的には余り差異はなく、春、秋に少し多い様であった。

外傷発生は、1週間を通じて前半がやや多かった。

又、時間的にみたところでは、昼休みと放課後が非常に多く、始業前の外傷も比較的多かった。

外傷発生場所は、運動場が圧倒的に多く、全体の約半数を占め、次に教室内、廊下、屋上、階段の順であった。

外傷の種類と部位では、捻挫と挫創が殆んど同数で最も多く、捻挫の部位は両足関節と両腕関節に、挫創の部位は、四肢と顔面に多くみられた。次に多かったのは骨折で、部位は左右前腕部が多く、鎖骨骨折も4

たふ今の御登名は耐しまして

御意見や 御質問や ご意見をお願いします

とーる さん

例あった。更に打撲症が骨折について多く、部位は頭が約半数をしめ、その中脳振盪を伴ったものが6例含まれていたが、いずれも比較的軽症で荒木氏の分類によるⅢ型（脳挫傷型）、Ⅳ型（頭蓋内出血型）は1例

もなかった。その他の外傷としては、切創、裂傷が比較的多く、角膜損傷、火傷、歯牙脱落等も少数みられた。

白川 さん 人間関係

9. 学校近視の対策（眼科用超音波治療器を使用して）（10：20）

三上和子（滋賀浅井中）

最近児童生徒の体格の発育ぶりは目指ましいものがあるが、一方ではテレビの普及や受験勉強による眼の酷使のせい生徒達の近視は年を追って増加しつつある現状である。

本校の学区内には眼科医師もなく仮性近視のうちに受診する者もきわめて少いため、本校眼科校医新宅幸造先生の指導の下に「眼科用低数帯域超草波治療器（厚生省承認）」を使用して学校近視の治療を試みた。開始後漸く2年を経過し例数は少いが暫次好結果が得られ学校近視の治療には適しているのではないかと結論に達したので発表します。

この超音波治療器は2SB80を使用して12KC磁歪振動子を電圧6Vで作動し、第2高波を出現させ、これを刺戟波として利用したもので、水晶体の周囲の神経や筋肉の緊張をときほぐして、眼の新陳代謝を促進する理学療法で、片手で持つことのできる手軽な器械である。

治療方法は導子部を、軽く瞼をとじた上から密着さ

せてあてる。片眼投射で1日10分間を毎日左右交互に投射する。出来れば1日2回朝夕投射し、20回投射して1クールとする。視力上昇の兆が見えれば継続して投射し1クールで効果のない場合は更に1クールを重ねそれでも効果のない場合は中止する。

第一次第二次治療をあわせて84眼実施し、治療眼29眼、軽快眼29眼、不変眼26眼となり結局73.1%の改善をみることができた。

近視は慢性疾患であるだけに、短期内で治療する者もあるが、それ相当の忍耐と努力が必要であり、罹患児のなおそうという意欲がなくてはならない。

尚学校近視治療の対象はやはり仮性近視を重点的に早期に発見して早期に治療することが特に大切であろうと思われる。

仮性近視の治療は、すなわち近視の予防につながるものであり、本人の近視予防に対する自覚と注意が肝要である。

近視児
常用

川口

サカサ原

法取扱い

10. 滋賀県児童の心臓病管理（10：30）

大西豊彦（滋賀県医師会学校医部）

滋賀県医師会学校医部では県学校保健会、県教委と協力して、昭和41年度から県下学童の心臓病検診及びその管理にとりくんでいるが、今回は小学生児童の心臓病の実態についてのべる。

県下小学校児童8万名から、一次及び二次スクリー

ニングで要精検児360名を選び出し、心臓精密検診を行なった。その結果先天性心疾患児、114名、後天性心臓弁膜症児19名を認めた。

検診のための組織づくり、検診の内容、管理について報告する。

別々
82名
→

150
VSD

大西 さん
サカサ原
モアハハイ

11. インフルエンザ流行について学校保健よりみた考察（10：40）

川口 宏（和歌山医大公衛和歌山教育庁）

インフルエンザ（以下「イ」と略す）は毎年のように発生し、学校では臨休や学級閉鎖をくりかえしている。従来「イ」についての疫学的研究が行なわれているが、学問的価値があっても、教育現場で活用される資料としての研究が乏しい現状である。昭和43年1月から和歌山県下に流行せるA₂型「イ」について、学校保健の立場から追求した結果を発表する。

- 1) 対象は、和歌山県下の小、中、高校で養護教員の配置されている学校 120校。
- 2) 前記学校にアンケート用紙（罫）を配布し、50校（小学校25校、中学校11校、高校14校）より回答を得た。（資料回収率41.6%）
- 3) 「イ」による病欠率が15%以上になっているにもかかわらず、学業がおくれるとか、症状が軽いという理由で、学級閉鎖をしない学校が41校中22校（53.7%）あった。
- 4) 臨休校20校のうち、臨休期間3日以内12校、臨

休4日7校、臨休5日1校で、教育庁の通達による「5日臨休」を実施したのは、僅か1校であった。

- 5) 「イ」ワクチン接種については、効果が少ないのと、高価なため、接種率は小学校89%、中学校86%、高校49%であった。
- 6) 「イ」流行について、学校で特別に職員会議を持ったのは23校（46%）、また、学校保健委員会を持ったのは、僅かに9校（18%）であった。
- 7) 保護者にたいして「プリント」を配布して「イ」の予防に警告を発したのは、30校（60%）あったが、出席停止が充分守られたのは、そのうち17校（57%）であった。
- 8) その他、学校において「イ」流行を阻止する対策は、一般に学校としての主体性に乏しく、時期を失したり、多くの不徹底が見られ、今後改善すべき点が多く指摘される。

○ 12. 大阪市に於ける学校教室の冬期環境の実態について（10：50）

細 部 新一郎 ○ 庄 司 績（大阪市学校薬剤師会）

昭和41年1月～3月初旬の間に大阪市学校薬剤師会に於て学校教室の空気の中特に気温、気湿、二酸化炭素濃度、塵埃量について市内452校園より比較的ランダムに抽出された約300教室の統一測定を実施した。

その結果は既に「保健科学」VOL 91 第一報及びVOL 92 第二報に発表したので割愛し測定結果の考察にふれてみたい。

- ① 気温では10℃～20℃が95%に及ぶ数を示し、本測定標本に関しては勉強に不適な低温は2%に過ぎない。従って母集団に於ける比率も略同様と推定して誤りないと考える。
- ② 気温では教室内で湯気を立てるべきかどうかという点が問題点であるが、ガス、石炭ストーブを通じて、湯気を立てると立てないで3～4%の温度差があった。又石炭ストーブではガスに比し約10%低湿である。何れの暖房器具でも冬季快適温度より稍乾燥気味であるので此点の考慮が望ましい。

- ③ 塵埃については室内外の浮遊塵埃量には特に有意差はなかった。暖房器具別に見ると炭石ストーブ室では乾燥の為室内発塵が稍多い外特に問題点は発見できなかった。

④ 二酸化炭素濃度について

暖房方式別に見ると都市ガスによる無煙突暖房が52%を占め逐次石炭ストーブに代りつつある。然し乍ら都市ガスによる無煙突暖房の場合二酸化炭素濃度の増加は例えば授業第二時限に於て80%の標本が、上限0.15%をこえている。ここで問題となるのは、

- a) 保温を考慮しつつ行う適切な換気方法
- b) 無煙突暖房の基本的欠陥と衛生学的な閾値に対する再検

の二点である。大阪市学業では特に第二点について目下研究中である。尚標題の資料統計等については大迫氏の協力に負う所が多い。

13. 高校生修学旅行における疲労についての一考察 (11:00)

矢 田 節 彦 (大阪教育大附属高) 上 林 久 雄 (保健学教室)

最近、修学旅行における生徒の行動面や健康面について種々論議がなされて、修学旅行の再検討が考えられつつある。我々は、高校生の長期修学旅行における生徒の健康管理や健康指導に資する目的で、大阪教育大学附属高校天王寺校舎の2年生に実施された9泊10

日の北海道旅行中及びその前後の期間における参加生徒の疲労状態を自覚的・症状検査、尿蛋白及びフリッカ一値検査によりしらべたところ、若干の知見をえたので報告する。

14. 安全教育をふまえた体力づくり (11:10)

門 川 義 信 (滋賀彦根佐和山小)

1 地域の実態

旧彦根町を東南部にかこむ形をした細長く広い区域で、南北に6kmもある。

2 交通のはげしい地域

東海道線、近江鉄道が本学区を縦貫して踏切も多い。又国道八号線、名神高速道路インターチェンジ導入路、彦根駅を中心とするバス路線があり、自動車通行の多い道路が通っている。

3 校舎、校地の実態

狭隘で適正とはいいがたい。これは市内17小学校中16位で運動場は児童1人当7.14㎡最低である。

4 児童の実態

- ・筋力がなく、タイミングが悪い。
- ・瞬発力を利用する運動能力がない。
- ・空中バランスがうまくとれない。
- ・持久力のない子が多い。

5 安全教育と体育の関係

体力づくり、即安全教育と言っても過言ではない。体力づくりが子どもの日常の危険に対処する「身のこな

し」という安全行動に結びつくからである。

6 問題解決への施策

○安全トレーニングを考えた遊びの指導

子どもの遊びの中から、安全技能につながるものを考え遊びの中に取り入れる (事例)

○体育時、業間体育における指導

各運動領域から、安全教育のトレーニングになるものを考え安全教育と結びつけ考えた。又業間体育に於ては、どんなとき、どんな場所、どんな状況下にあっても、正しい判断をもって反射的にからだをまもる態度行動がとれるものを中心に考えた。

7 家庭や遊びの時にやる安全トレーニング

この運動は、室内でも、戸外でも行なえるものを選んだものである。(図表)

8 安全技能をたしかめる運動

子どもが自主的に自分の技能、体力をためすために作成した。(図表)

9 まとめ

15. 中学校における保健学習と生徒自治活動との有機的関連の指導について (11:20)

山 本 隆 男 (滋賀蒲生安土中)

- 1 主題設定の理由 保健学習と保健指導とが形式的な関連に走り互に循環をしていない現状である。この両者の有機的な関連を研究することによって学校保健の目的達成の資料としたい。
- 2 研究目標 中学校における保健指導の実際を検討し、簡単な考察を加え指導上の問題点の概略をつかみ、保健学習と生徒の保健自治活動の有機的関連の指導について研究する。
- 3 研究の計画及び方法 研究対象は2校 420名の中学生全学年とする。方法は保健指導の実態は握のため保健指導アンケートをとる。
- 4 保健指導実態調査考察概要のまとめ。
 - (1) 意識の面 「自分の体について」考えている生徒がほとんどである。
 - (2) 知識の面 内容的にも大体理解できているが保健学習の知識偏重におちいりやすい。
 - (3) 指導体制が不十分である 保健学習においても、自治活動をねらう保健指導においても教師の関心が低い。
 - (4) 実践の面 現状の活動においても生徒の希望の場においても、学級活動の場での率が多いのは注目すべき点であり、自治活動につながりが充分でないのは具体性に欠けていることにもなり今後の

問題である。

- (5) 生徒会活動の場での保健活動が低率を示しているのも問題があり研究を必要とする。

5 今後の指導にあたって

◎学校保健と特別教育活動（学級活動）

以上の実態調査からも考えられることは、教師は保健学習の構造化を研究し生徒自身が自己の問題として積極的に取り組むよう指導法の研究が急務である。保健学習と保健指導の有機的な関連が生徒の自治的活動によってしっかり組み合わせはじめて、その目的が達成されるのであると思う。こうした意味において有機的関連の場として特別教育活動を重要視しなければならないと思う。特に全教育活動の基盤である所の学級経営を含めた学級活動の場で保健指導が充分になされ、生徒自身、自分達の問題として実践を通して活動していくよう計画し、助言し、又その活動が生徒会にはんえいし保健学習に帰って行く有機的な実のある循環する指導としたい。勿論学級活動が不活発では、生徒会活動も不振となり形式的なものとなるのである。今後は特に学校保健の年間計画をしっかり立て、学級活動で保健指導をしっかりとらえ尚学級行事（保健行事）でおさえて行くようにしたい。年間計画は健康教室増刊号を参考にするとよい。

肥満児の対策

助言者 京大医学部小児科 須藤正克 司会 滋賀県大津市 植村良雄

○本校の肥満児の実態とその対策について

堤 泰雄 (滋賀長浜小校医) 蒲生 芳子 (滋賀長浜小)

一般に「肥満児は運動能力の低下。容姿からくる自己卑下、周囲の心ない言動による孤独感などの情緒障害。肥満からくる心臓疾患糖尿など内臓器管の障害などが予想され、児童の健康管理上大きな問題である」といわれている。

しかも肥満児は年毎に増えつつあり、本校においても41年度2.3%、42年度2.6%、43年度2.7%と上昇カーブを示している。

特に肥満児対策は身長のもっとも伸びる小学校高学年に実施するのがよいといわれている。日々肥った子を見るにつけ、今のうちに何とかしてやらなければと強く思う。そして「できるだけ処置を」と願う心からこの問題にとり組むこととした。

1. 肥満児の判定基準

- (1) ローレル指数
- (2) 肥満度
- (3) 校医検診及び判定 (ローレル指数には発育段階における体型変化が組みこまれていないので肥満度と一致しない。そこで校医の判定が必要である。)

2. 実態

- (1) 肥満児童数と推移
- (2) 原因追求のための調査
 - ア 遺伝的素因
 - イ 生活状況と環境
 - ウ 肥り出した年令
 - エ 食餌
- (3) 肥満症による障害
 - ア 身体面 (運動能力と身体機能)
 - イ 精神面

3. 対策

- (1) 目標
 - 肥満体 → 標準体格
 - 脂肪ぶとり → 筋肉づくり
 - 運動能力低下 → 運動能力向上
 - 緩慢な行動 → 敏捷な行動
- (2) 具体的方法
 - ア 食餌
 - イ 運動能力
 - ウ 精神的配慮

○肥満児に対する運動処方の効果

山岡 誠一 (京都教育大)

国民栄養の改善にともない青少年の体位が著しく向上した反面に、体力や運動能力が体位の伸びにともなわないことや、肥満児が年々増加しつつあることが問題視されるようになってきた。肥満の原因としてホルモン系の異常によることもあるが、その多くは栄養と運動のアンバランスにあるとされ、肥満児対策として

減食療法が効を奏している。われわれは運動療法に期待をかけて肥満児教室を開設した。

昨年10月中旬より中学校1年生の肥満児に、週3回 (月・水・金)、毎回1時間 (午後4時より5時まで) 中学校の体育教材を中心とした身体運動 (運動実時間約40分、平均 R.M.R 5程度) を行なわせた。その結果

12月中旬までの約2ヶ月間に700gの体重の減少がみられた。また1月中旬より再開し2月末までの約40日間に1000～1500gの低下が観察できた。

体力や運動能力の測定の結果では、季節的な影響もあって10月と12月に運動能力の伸びの効果は認められなかったが、筋力や敏捷性が増大し、2月には体力、運動能力ともに10%前後の向上を認め、性格も快活になり行動が活動的になっていた。

当初ローレル指数が180にも遠く、体脂肪が体重の30%以上ももっている肥満児であったがために、1～2kgの体重の減少では目に見えた効果は認められないが、秋から冬への体重増大期（この間に一般生徒では約2kg体重が増大していた）であることを思えば、体力や運動能力、あるいは性格の改善とともに、肥満児に対する運動処方の効果は高く評価してよいであろう。

○ 大津市における肥満児の実態

齊 藤 和佐子（滋賀大津市学校保健連絡協議会）

昭和42年度在学的全児童・生徒について調査を行ない、別表の如く児童に1.72%、生徒に2.63%の肥満症を認めた。尚この調査に於ては、大津地区全児童生徒について、学年別・性別・身長別の体重表を作製し標準体重を20%以上上まわるものを肥満とした。ローレル指数による判定も同時に行なったが、之によれば指数160を超えたものは児童0.84%、生徒1.18%にすぎなかった。

42年春の体位測定を基準として実施したが、標準体重表作製に時日を要したため、選ばれた肥満児について実態調査を行なったのは、秋より冬になっていた。得られた肥満児は約370、対象として痩せ型同じく約370、及び普通体型のもの約700、即ちおおむね1：1：2の比において、主として食生活を中心として調査を実施、現在整理集計中であるので、まとめて報告したいと考えている。

大津市児童・生徒に於ける肥満症の頻度（1967年5月）

	男			女			計		
	調査数	標準体重 20%超	ローレル指 数 160以上	調査数	20%超	160以上	調査数	20%超	160以上
1	1,194	0.25	0.25	1,089	0.37	0.27	2,283	0.31	0.22
2	1,082	0.83	0.28	1,046	0.86	0.57	2,128	0.85	0.42
3	1,158	1.56	0.52	1,064	1.68	0.94	2,222	1.62	0.72
4	1,044	2.77	1.34	945	2.22	1.16	1,989	2.51	1.26
5	956	2.51	1.36	932	2.79	1.29	1,888	2.62	1.31
6	1,048	2.95	1.15	944	2.45	1.27	1,992	2.76	1.25
計	6,482	1.76%	0.79%	6,020	1.66%	0.89%	12,502	1.72%	0.84%
1	909	2.20	0.66	962	3.22	1.14	1,871	2.73	0.92
2	973	2.35	0.72	895	3.57	2.15	1,868	2.95	1.39
3	1,104	0.91	0.45	977	3.78	2.15	2,081	2.26	1.25
計	2,986	1.78%	0.60%	2,834	3.52%	1.79%	5,820	2.63%	1.18%

○和歌山県における肥満児の実態

井上 彬
~~西 州 清 定~~ (和歌山学校医師会)

メ	モ
---	---

シンポジウム(その2)

溶連菌感染症

助言者 京大医学部内科 河北成一 司会 本原貫一郎

○大津市F小学校における溶連菌感染症の実態調査

竹内つね(大津市医師会)

大津市立F小学校児童約250名について昭和42年度より、溶連菌感染症の実態調査ならびに、追跡調査をおこなってきた。

調査方法は全学童に咽頭菌培養を施行し、その結果β溶連菌陽性者についてASLO値、血沈・検尿をおこない、一部心電図、CRP、RAテスト等の検査を加えた。なおβ溶連菌陰性者についてもASLO値などの検索をした。菌陽性者は年3～4回の定期検診をおこない検査結果の推移を観察した。又ASLO高値、β溶連菌陽性者の一部の児童について、ペニシリン投与を行いその効果もあわせ観察した。

本邦健康学童における従来の成績と比較しながらF

小学校の溶連菌感染症の実態についてのべる。

なお、追跡調査の結果からはまだ短期間であるが、ASLO高値の学童の中には一年半の経過において不変であり、何等の疾病異常を呈さないものが相当数みられた。

ペニシリン投与の効果はβ溶連菌の咽頭における陰性化に関しては有効であるがその後再び陽性化するものも相当数みられる。

また、ASLO高値の学童に対する対策ならびにその他溶連菌感染症の二三の問題点についても私見をのべる。

○学校歯科の立場から見た溶連菌

佐藤 守(滋賀県学校歯科医会)

学童のう蝕が全身におよぼす悪影響については、我々が平素大いに懸念しているところである。特に学童疾病の中で、小、中、高校を通じ常に最高の罹患率を示すう蝕が、依然低調な処置率で放置されている現状は誠に遺憾であると共に、今回のテーマである溶連菌の面からも憂慮すべき多くの問題を含んでいるようである。なぜならば近年その発生がとみに増加していると云われる学童のリュウマチ及びそれに起因すると言われる心臓疾患は、偶々吾々の領域において増加傾向を示している重症う蝕症の発現状態と環境的、体質的、生化学的な面において甚だ類似しており、①ASLO値の上昇、②血沈の著しい促進、③血色素低下等という特徴や、しかもそれらが、④歯の治療によって

症状が軽快したという報告によって裏付けられているからである。すでに、Billing(1912)は、これ等全身疾患の原発病巣の58%は扁桃にあり、歯牙の24.6%がそれに繼ぐことを指摘しており、後者を「歯性病巣感染」と称している。更にBurket, Burn等も、その原発病巣の細菌として、緑色連鎖球菌61.2%とともに溶連菌10.2%を検出し、レンサ球菌のこの種疾患に与える影響を重視している。しかも歯牙の疾患の大部分が慢性の経過をとりそれ自身は大した病像を現わさないままに放置されている現在、学童の口腔内に存在する乳歯感染根管からは溶連菌、特にA群溶連菌が検出されそれが咀嚼、マッサージ、抜歯等による一過性の菌血症の発見に無関係でないという報告にも注目すべ

きであろう。しかも、誠に残念ながら、この種の研究は最近ようやく再注目の傾向にあるとはいえ、歯科方面からの積極的な研究は少ない現状であり、むしろ、斯かる学校保健の場で関係各面の協力によって追求されてゆくことに大きな意義を感じるのである。勿論そのためには、学校歯科医自身が、検診一辺倒の従来の在

り方から脱脚し、データの分析・考察から、行政面も含んで関係各面との積極的な協力態勢を整える必要性も痛感しているのである。

学童期の子供の歯は常にその時期の子供の保健と密接な関係があるばかりでなく、その生涯を通じて重大なる影響を与えることを重ねて強調したい。

○ 和歌山県における溶連菌感染症の調査

~~井土 彬~~ (和歌山学校保健会)
西川 淳定

メ モ

特 別 講 演

学 校 の 精 神 衛 生

元大阪市大教授 三国丘病院長 中 脩 三

I 学校と家庭

社会的適応 指導と服従

II 学校前の教育 幼児教育の重要性

認められるよろこびと誇り

III 特殊教育と精神衛生

競争, ギャンクエージ

教育と医学の問題

4) 高学年の要求

VI 幼稚園に於ける精神衛生

自己意識

排泄の訓練 母の態度 夜尿

集団と自己

食事の訓練 家庭の習慣

自己評価 劣等感と優越感

睡眠の訓練 眠る子は肥る, テレビの見過ぎ,

悪知恵, ぬけ目なし, 勇気, 社会性, 友情,

母の金貰いの犠牲, 夜だけおきる子供等

内向性と外向性

過保護一肥満児 おばあさん子

(a) 安定感 (b) 自己表現 (c) 社会

放任, 不定, おちつきのない子, 家族構成,

適応

権威の不在, 父不在

V 小学校の責任

V 小学校に於ける精神衛生

1) 身体的, 精神的, 個人的要求の満足

1) 原始集団と二次集団の差

2) 社会性の開発

2) 体育と知能の問題

態度, 行動, リクリエーション, 勉強, 運

3) 体型の変化

動, 趣味, 人間関係, 児童の性の問題, その

4) 早熟児と晩熟児

他よい習慣の養成

VI 小学校に於ける基本的欲求

VI 児童の精神障害

1) 適応とは何ぞや 無意識の発見

1) 精神薄弱

2) 児童の適応の問題

2) てんかん 意識障害

心理的離乳

3) 脳性小児麻痺

3) 低学年の要求

4) 異常適応 神経質, 自閉症, ヒステリー, チッ

習慣と態度の訓練

ク

生活の訓練

慢性攻撃反応 行動抑制, 学校ざらい, 登校拒

学習に於ける習慣と態度

否等